東日本大震災「3・11」陸前高田を訪ねる

「前に進めない人の傾聴を」

「もう7年」「まだ7年」交錯する思い

東日本大震災から7年を迎えた3月11日、岩手県陸前高田市にある東北教区災害ボランティアセンター出張所「陸前高田とまり木」を訪ねた。「もう7年」「まだ7年」の思いが交錯する被災地の姿とともに、深刻な心の悩みを傾聴していこうとする、地元の人たちの姿があった。

宗派の僧侶と「こころのもり」のスタッフが講師となり、陸前高田市で3月10日に開かれた傾聴ボランティアの養成講座。左の男性が西條正夫さん

陸前高田市の中心部から車で約30分の沿岸部にある「とまり木」。外は時季はずれのポカポカ陽気だった。

「とまり木」を活動拠点にする現地の傾聴ボランティアグループ「こころのもり」の代表を務める西條正夫さん(70)は、7回目の「3月11日」に穏やかな口調で語った。「あの日は寒かったのに」。

あれから7年。西條さんは周囲の人にこう漏らす。「航空写真で陸前高田を見比べたら、直後と7年経った今もほとんど変わらない。宅地が整備されたり、防潮堤もできたけど、町全体から見たらほんの一部。もう7年。町も人の心も復興はまだまだ」と。

◇

プレハブの「とまり木」が建つのは、西條さんの自宅隣。もともとは、母が長年営んでいた洋品店があった場所だ。津波で半壊した店は取り壊した。

西條さんは震災後、町の人たちの支えになりたいと、宗派が仙台別院(仙台市青葉区)で開いた傾聴活動のボランティア養成講座を受けた。そこで、陸前高田の仮設住宅を訪ね歩いている西本願寺の僧侶たちの存在を知り、その拠点にと、土地の提供を申し出た。

西條さんは震災の翌年に、地元の人たちと「こころのもり」を組織し、仮設住宅や移転先の家を訪ねて住民の声に耳を傾けてきた。7年経った今、心の面も深刻と語る。「仮設住宅から高台の新居や災害公営住宅へ移っても、ひきこもってしまう人もいる。前に進めない人はまわりの幸せからの『取り残された感』で苦しんでいる。これまでは『みんな被災しているから』と我慢してこれたこと「かなやん」と息子を見るが、『なんで私だけ』と今になって悲しみが増す人も…。まだまだなのに、気付けばもう7年だからね」と話した。

陸前高田市の東北教区ボランティアセンター出張所「とまり木」

◇

「こころのもり」をサポートしているのが宗派の僧侶たち。本願寺派総合研究所の安部智海さん(40)と、龍谷大学の金澤豊さん(37)震災当時は同研究所が中心になって定期的に陸前高田を訪れ、西條さんらと一緒に居室訪問をし、現地でのボランティア養成講座の開催を手伝ってきた。西條さんは2人を「ちーちゃん」「かなやん」と息子を見るような目で優しく呼ぶ。

「こころのもり」は3月10日と17日、安部さんと金澤さんを講師に招き、陸前高田市役所の会議室で養成講座を開いた。スタッフを含めた17人が参加した。「震災から7年。公営住宅(仮設住宅)にいてどんな気持ちになるか」「苦悩を抱えている時、どんな態度の人に話を聞いてほしいか」などをテーマに意見を交わし、相談者役と聞き手役に分かれたロールプレイなどで体験的に学んだ。

安部さんは訪問活動の体験を語り、「『オレ、日本中からいじめられる』と嘆いていた男性が、帰り際に『世のなか捨てたもんじゃないな』と言われた。誰一人わかってもらえないという苦しみの中で、少しだけ心が動いた瞬間だった。たった一瞬、かりそめかもしれないが、『心の居場所』を作れるよう、私たちはその『変化』になりたいと活動を続けている」と話した。

3月11日、2人は市内を車で回り、これまで活動で出会った人たちと再会した。安部さんも金澤さんも、ここ数年で東北を訪れる機会は減ったと話す。この日訪ねた、ある遺族からは「7年経って、今頃出てきた苦しみもある。いよいよ、ひとの思いに耳を傾ける人が必要」と打ち明けられた。

西條さんは「被災地には、普通に見えても家族にも話せないほどの苦しみを抱えた人が多い。スタッフにも家族を亡くした人や今も仮設で暮らす人がいる。一般の傾聴から一歩深めて、『死にたい』ほどの気持ちの人に寄り添うという本願寺さんの姿勢が、ここでは求められている」と話し、「傾聴のノウハウもわからない中、細い枝が太い幹になるようにと本願寺さんが寄り添ってくれた。本当に感謝している」と語る。

「こころのもり」は今後も年2回、総合研究所の僧侶を招き、ボランティア養成講座を開いていく。